

出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

平成30年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文
障害者週間のポスター

平成30年11月

富 山 県

目次

心こころの輪りんを広ひろげる体験たいけん作文ぶん入賞いしょう作品さく品

最優秀賞

小学生の部

手話を通しての心の輪

射水市立大島小学校 五年

本ほん多だ優ゆ月づき
…………… 1

中学生の部

優しさのバトン

富山市立岩瀬中学校 三年

灰はい庭にわ愛あ結ゆ
…………… 3

高校生・一般の部

同じ「人間」として

富山県立南砺福野高等学校 三年

村むら井い優ゆ希き乃の
…………… 5

優秀賞

小学生の部

ハンドバイクとの出会い
ぼくとしようがい者

黒部市立生地小学校 四年
射水市立大島小学校 四年
上川畑 俊
谷 亜斗夢
……
9 7

中学生の部

障害のある人も、ない人も
障害

上市町立上市中学校 三年
上市町立上市中学校 二年
碓井 藤美 結
井 藤美 結
……
13 11

高校生・一般の部

経験の中で得たもの
小さな工夫は大きな希望

富山県立南砺福野高等学校 三年
富山県立南砺福野高等学校 三年
追小 寺里 奈
分 寺里 奈
……
17 15

障害者週間のポスター入賞作品

最優秀賞

小学生の部

楽しいピアノの音

富山市立東部小学校 三年

南日花陽実

19

中学生の部

助ける心繋がる心

射水市立小杉中学校 二年

竹内沙羅

優秀賞

小学生の部

たすけあいの心

高岡市立福岡小学校 三年

石浦

20

みんなが仲良く暮らせる社会へ

富山市立藤ノ木小学校 六年

林瑞葉

中学生の部

みんなが生きる安心社会

射水市立小杉中学校 二年

高松寧々

心の壁をつくらないで

射水市立小杉中学校 二年

服部颯希

参考資料

平成三十年年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領……………21

平成三十年年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況……………24

平成三十年年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿……………25

「手話を通しての心の輪」

射水市立大島小学校 五年

ほん だ ゆ づき
本 多 優 月

わたしは、四年生の時からおばあちゃんと妹と、手話サークルに通っています。手話サークルには、耳にしよう害を持っている人、耳にしよう害を持っていない人が来ています。しよう害がある人には、手話で話しをしています。手話には指文字や、言葉を表す手話があり、とてもむずかしいです。わたしのおばあちゃんや他のサークルの人は、しよう害のある人やない人に、ふつうにしゃべりかけているように手話で話しをしています。わたしもふつうに話しをするように、手話をしてみたいと思いました。

でも、しよう害を持った人とあまりふれ合ったことがないので、どうやって話せばよいのか分からなくて、サークルに入ったころははずかしくて、おばあちゃんのそばにいました。少しずつ手話を覚えてあいさつが出来るようになって、「こんばんは」「や」「さようなら」など、あいさつが出来るようになり

ました。すると、はずかしさもなくなりました。

いろいろな人とかかわる中で、あいさつと表情も大切だと思いました。手話では、「あまい」だとあま〜い顔をして手話をし、「からい」だとから〜い顔をして手話をします。言葉や、手話だけではなく表情で伝え合うことも大切だと分かりました。

どうしたら、しよう害を持っている人としよう害を持っていない人が、仲良くくらししていけるか考えてみました。その人の持っているしよう害を理かいして、受けとめたら仲良くくらしせると思いました。自分のことを理かいしてくれたら、話しやすいしうれしいと思います。そのために、伝えるための言葉である手話が必要だと思いました。

わたしは、これから少しずつ手話を覚えて、耳にしよう害を持っている人が伝えられなくてこまっているときや、耳にし

よう害を持っている人に伝えれなくて、こまっている人がいたら伝えるお手伝いをしたいです。そして、手話を通していろいろな人と話しをしたいと思えます。

「優しさのボタン」

富山市立岩瀬中学校 三年

灰庭愛結
はい にわ あ ゆ

私には「心臓病」という持病があります。小学生のとき「心臓病がうつる」ときけられたり、触ると菌まわしされたり、「心臓病のくせに」とバカにされることもありました。そのときはとてもつらかったのを覚えています。

「心臓病」の詳しい名前は、「心室中隔欠損症」と「肺動脈狭窄」と「心臓弁膜症」というもので、生まれつき、右心室と左心室の間に穴があいていて、一歳半のときに、その治療をするための手術をしました。手術前の私はすごく元気で、いつもニコニコしていたのに、手術後はショックで笑えなくなっていて親はとても心配したそうです。手術の跡は今でも大きく胸に残っていて、友達がすごくおどろくこともあります。四歳のときには、「遺伝性球状赤血球症」という、もう一つの生まれつきの病気を治すために、脾臓と胆のうを摘出する手術をしました。貧血になりやすかったので、輸血を今まで

に10回しました。この手術をする前に心臓の手術をした症例が世界で4人で、とてもめずらしい手術でした。両親はそれを聞き、手術が成功するかとても心配で不安だったそうです。

入院しているとき、私は幼稚園に行けず、病室でじつとしいなければなりません。他の子と違って外に遊びにもいけないことがつらく、とても退屈していたのを覚えています。母はそんな私のそばにずっといてくれました。暑いときは、うちわであおいでくれました。父は、仕事で忙しかったのに、毎日病院にお見舞いに来てくれました。父も母もきつと大変だったと思います。

病気にかかることはとてもつらいです。一生治らない病気もあります。好きで病気にかかっているわけでもないのに、いじめにあっている人もいます。

前に友達と駅前に行ったとき、何の病気かはわかりません

繋いでいけるといいと思います。

でしたが、どこか悪いのだなとひと目でわかるように歩いて
いる人がいました。すると、その人を見て笑っている人やジ
ロジロ見ている人がいるのです。それを見て私はすごく腹が
たちました。なぜ病気をもっている人はいじめられなければ
ならないのか、なぜ笑われなければならないのか、私は間違
っていると思います。もし、その笑っていた人が病気をもつ
ていたら、きつといやな気持ちになったはずです。

私は、小さいときから運動制限がかかっていたり、いろん
なところで周りと違ったので苦労しましたが、今はすごく元
気で、男の子みたいにとっても活発です。バドミントン部の部
長もしていました。気のあう仲間もいて、学校生活もすごく
楽しいです。ここまで元気になるまでに病院にはたくさん行
きました。辛いことや悲しいことをたくさん経験し、病気で
苦しむ人の気持ちやいじめたり笑われたりする人の気持ちが
わかるようになりました。また、病気や障害をもつ人がいる
家族の気持ちもわかります。だから、ここまで立派に育てて
くれた両親にとっても感謝しています。

そして、これからは、病気で苦しんでいる人や障害をもつ
ためにいじめられたりする人に出会ったら、両親が私にして
くれたように優しく接していきたいと思います。周りの人に
も私の経験を語り、優しさのバトンを渡し、たくさんの人に

富山県立南砺福野高等学校 三年

「同じ「人間」として」

むら い ゆきの
村 井 優希乃

私は、高校二年生の時の研修旅行で、千葉県にある「恋する豚研究所」へ見学に行きました。恋する豚研究所と聞いて、恋する豚？と不思議に思いました。実際に訪れてみると、杉林や畑の広がる場所に位置し、館内は木のぬくもりがある内装で、暖かな雰囲気が印象的でした。

恋する豚研究所は就労継続支援A型という事業所で、障害をもった方の作業所となっています。案内して下さった方からお話を聞き、私は、「障害があるうともなかるうとも、身だしなみ、振る舞いはしっかりする」という言葉に衝撃を受けました。障害の有無関係なく、仕事として、しっかりと業務をこなしてもらおう姿勢が、私が今まで思ってきた障害者雇用のイメージと全然違いました。障害者の方に合わせて、負担なく、のんびりと作業してもらおうというイメージであったため、その方に合わせた仕事内容や場所にはされていました

が、団体として、しっかりするところはしっかりする、注意する時は注意すると、少し厳しくされている部分もあるのだとわかりました。

また、「失敗してもいいからやってみよう」という考えも印象深かったです。包丁をもって豚肉を切ることは危険で難しい作業ですが、実際にやってみようと思えることもあるよいうで、「障害があるからできない」と決めつけるのは良くないということを教えていただきました。最初は上手くいきませんが、だんだん上手になっていき、障害者の方もいきいきしていると言われていたため、新しいこと、多少難しいことを行ってもらい、それを達成することで自分への自信に繋がっていくのではないかと考えました。障害者の方のできることが増え、可能性を広げていっているのだと感じ、失敗してもいいという姿勢だからこそ、安心して作業を行い、できること

が増えるのではないかと思いました。

ここでは、障害者の方に生活できるだけの給与が与えられているということも知りました。月に10万円を支払えるようにしておられるそうです。自分で稼いだお金で好きなものを買えるということで、生活が明るくなって生きる楽しみになると思いました。

昼の時間に見学させてもらったため、恋する豚研究所のレストランでランチをいただきました。メニューはしゃぶしゃぶでした。豚を育てる上でエサにこだわっておられることもあり、豚肉には甘みがあり柔らかく、とても美味しかったです。もちろん野菜も、ポン酢もどれも美味しくいただきました。平日にもかかわらず私たちだけでなく一般の方々も足を運ばれ、店内はにぎわいを見せていました。案内して下さった方も、いつも満席になると言っておられ、様々な人に支持されているこのレストランは、愛されているなと感じました。私も機会があればまた来たいです。食材も全てで地域のものを使用しており、スーパーでも販売されていることを知りました。「食」を核として地域と繋がっており、こんなにも人と繋がることのできる福祉はとてまたたかいものだと思えました。また、食は誰にとっても身近なものであるため、これを中心にすればいろいろな人が関わりやすくなるのではない

いかと考えました。

数時間の訪問でしたが、この恋する豚研究所の魅力をしっかりと感じる事ができました。障害者も健常者も職員。意識せずとその空間を共有しているところが、私は大変いいなと感じました。

障害者の方は、身体障害、知的障害、精神障害と一人ひとり障害の種類は異なりますが、みんな同じ人間です。障害をもつて生まれてきたい！と思つて生まれてきたわけではありません。健常者のようにあんなことしたい、こんなことしたいと心の内で思っていると思います。だからこそ、＼障害者だから＼という特別視をするのは良くないと私は考えます。障害者だからしたいこともさせてもらえなかったり、障害者だから過度に助けられたりすると、心が窮屈になってしまいます。恋する豚研究所のように、自由に、かつ自立を促した支援が必要になってくるのではないのでしょうか。もちろん、道端やバス、電車内で困っている様子であれば助けてあげることは当然のことです。障害者の方を区別せず同じ人間として接することで、障害者の方も心地よく過ごすことができるのだと思います。日本が、誰にとっても住みやすく、一人ひとりが明るく生活できる場所になることを願います。

「ハンドバイクとの出会い」

黒部市立生地小学校 四年

川 焔 俊
かわ はた しゅん

ぼくとハンドバイク（車いす自転車）との出会いは、一年前。「何これ」車いすでもスイスイすめる。かっこいいと思っただ。下半身のしよがいを持った人でも楽しめる、手でこぐ自転車。今まで見たことがなかったので一緒に楽しめたらよいと思っただ。

昨年の十一月から月に一回程度ハンドバイクと自転車の走行会に参加している。富山でハンドバイクという乗り物を知っただらうため、体験会を開いた。そして新しく二名のハンドバイカーが仲間となった。街を走行していると「車いす自転車をはじめて見た。速いね。」「すごいね、がんばれ。」「どんなになっただら。」と温かい声をかけてくれる。道路を走っただら、車だと気づかないようなんだん差やグレーチングのきけんな場所を発見できる。車いすだと入りにくいと遠りよしていたお店でランチをしたり、カフェを楽しんだりと参加者

からえ顔がたえず見られ、ぼくも自然に笑顔になる。こもりがちな人が、外にでていけるきっかけになるとよいと感じる。

「障がい」という言葉はマイナスのイメージとなりがちだが、一緒に楽しむとそのイメージは、完全になくなる。まずは自分が楽しむことで周りにも伝わる。おたがいにできないことは、助け合う、できることは、見守る。かんたんそうでもずかしい。

大人は、いろいろなことを体験する機会があるが、子供たちは親の手助けを必要とすることが多くたくさんの障がいはスポーツを楽しむことができない。ハンドバイクであれば、家族と同じように楽しむことができることでもっとふきゆうするとよいと感じた。障がいはスポーツは、可能性にあふれている。今回の活動を始めて、お手伝いを求めているのではなく、障がいがあっても共通のスポーツと一緒に楽しみたい

と思っている障がいを「かわいいそう」から「かっこいい」に変える活動を今後も続けていきたいと思う。みんなの笑顔が、たくさん見れるように、おたがいをみとめあう社会になることをねがう。

「ぼくとしょうがい者」

射水市立大島小学校 四年

かみ たに あとむ
上 谷 亜斗夢

ぼくのお父さんは、じんぞうが弱くて赤いしょうがい者手帳を持っている。ときどきつかれると足がむくんでパンパンになることがある。そんな時は階段を登るのがつらいと父さんは言う。赤い手帳は色々な事を国、県、市から助けてもらえる大切な物だと父さんは言っていた。父さんはよく亡くなった父さんのお姉さんの話をする。生きていたらぼくのおばさんの話だ。おばさんは、みじゆくじで生まれてすぐに高熱を出してそのため運動しんけいがだめになって一生ねたきりだったそうだ。「のうせい小児マヒ」と言うしょうがいだったそうだ。父さんが小学校のころは福しとか国のえん助がしつかりしていなかったので、家にねたきりの家族がいても助けてもらう事が少なくて、つらかったそうだ。父さんもおばさんが家にいることがいやで友達を家にいれなかったし、かくしていたそうだ。

今とちがつて家にしょうがい者がいる事を悪い事と思えて心を開けなかったと言う。それだけしょうがい者が社会に受け入れられなかったと言う。おばさんもいつも「こんな体で生まれて来たくなかった。」と泣いていたそうだ。その時にくらべれば今は幸せだけどまだまだ完全ではないと話していた。けんこうな人達がしょうがいを持つ人をもつと理かいして手を差しのべる社会にならないといけないと言う。ぼくはそんな話を聞いて弱い人を助けたり親切にする事がはずかしいとかめんどくさいと言う心はよくない事だと思った。「だれかやるだろう。ぼくには関係がない。」と思う人がいなくなつてみんなが協力すればいいと思う。けんこうな人もしょうがいを持つ人も心をつなげ合つてえ顔でくらせる社会が本当の幸せで平和な社会だと思った。

父さんはお姉さんを助けてあげられなかった事を「かわいそ

うな事をした。」と今も反せいしている。ぼくは今できることを一つ一つ実行していこうと思う。まずは父さんのお手伝いを一生けん命する事から始めよう。

上市町立上市中学校 三年

「障害のある人も、ない人も」

井藤美結

私が小学生の時、同じ学年に三人特別支援級に入っている、障害をもった子がいました。初めは特にみんな気にしていませんでしたが年を重ねるにつれ、周りに興味をもち、その子達に対して「少し変わってるな。」という気持ちをいだくようになりました。正直あまり関わりたくないと思っていました。ある日の放課後、特別支援級の子が体育館で暴れ始めました。その子は、よく自分の気持ちをおさえられなくなつて物を投げたり授業中でも走り回ったりすることがありました。その時も、下級生とけんかになり、みんなが帰った後、体育館にあるボールを全て出し、先生が片付けてもまた出しいつものようになっていました。私は友達と二人でその姿を見て、「自分も何かされたらどうしよう。」「少し怖いな。」と思っていました。でも先生も大変そうだし手伝ってあげようと思いい緒にボールの片付けをしました。その時は、先生だけ

が「ありがとう。」と言ってくれました。翌日、昨日、体育館で暴れていた子が私に手紙をわたしに来ました。見てみると「きのうはボールのかたづけをてつだってくれてありがとう。それなのにいじわるしてごめんね。」と書かれていました。私は、あの時小さなちっぽけな勇気だけで友達と二人でふりしぼり手伝って良かったと心から思いました。その子は、今はとても落ち着いていて、私よりもとっても頭が良いのでいかまた会った時には勉強でも教えてもらいたいです。

特別支援級の子で一人女の子がいました。その子は三つ子の一番下の子でみんなより発達が遅れていました。運動会の時も百メートル走を走るのでさえ大変そうでした。私達が当たり前のようにしていることもその子にとってはとても大変なことなのだと思います。小学四年生の頃、帰り道も一緒だったのでよく二人で帰りました。笑顔で楽しそうに話して

くれて私もうれしくなり、仲良くなれた気がしました。

障害がある、みんなと違うからといって関わらないというのはまちがった考えだと気づくことができました。みんな違うのは当たり前だし、だれにだってできないことはあるから障害がある、ないで区別していかないようにしていこうと思いました。

でも、実際病院やショッピングセンターなどで障害のある人を見たとき私は少し怖いと思ってしまう。何かされるんじゃないかと考えこつちへ来ないでと強く思うことがあります。もしかしたらその人は何か困っているのかもしれないと思うと障害があるから怖いという理由で逃げていてはダメだと思いました。もし、本当に助けを求めていたら勇気をふりしぼり優しく声をかけていきたいです。

私はこの世の中、もつと障害のある人となない人のふれあいが増えていけばいいと思います。私達と違うから、普通じゃないからと理由をつけ、関わりをなくすのはまちがっていると思います。そもそも普通とは何を基準にし、普通と言っているのでしょうか。そんな考えをみんなすて、障害のある人ない人のふれあいが増えればいいと思います。障害のある人も、できないことは多くあっても必ず良いところがあります。それはやっぱり関わってみないとわからないことだと思いま

す。そしてみんなもできないことはだれかに助けてもらっているように障害のある人、ない人で助け合い、それが当たり前になるような世の中になっていけばいいと思います。まずは、思いやりの心と少しの勇気をもつ人が増えていけばそんな世の中に近づく第一歩です。一人一人の思いやりがだれかを救います。障害のある人もない人も笑顔あふれるあたたかい世の中になればうれしいです。

「障害」

上市町立上市中学校 二年

碓井創太

ぼくは、口唇口蓋裂で生まれました。そして、生まれて間もない時から小学三年生までの間に五回の手術を受けました。口唇口蓋裂は聞き慣れない言葉だけれど、「みつくち」って言うのと、大抵の人には理解してもらえます。お母さんのお腹の中にいる間に、くつつくはずの上唇や上あごが、亀裂のあるまま生まれてきてしまう疾患です。

口唇口蓋裂は、ただ裂のある唇を閉じればいいというものではありませんでした。歯茎にも裂がある場合もあり、ぼくの歯茎も一見普通につながっているように見えるけれど、中は一部空洞になっていて、土台になる骨がありません。そのため、歯が生えてきたくても生えてこれない状態でした。だから、ぼくは、小学三年生の時に骨盤の骨を歯茎に移植する手術を受けました。その時に入院して、たくさんの人と接し、感じたことをここに書きたいと思います。

手術をした後、ぼくは歩けなくなっていました。骨を採つたので、足を動かすと強い痛みが走るのです。落ち着いてきた頃、痛みを我慢して歩く練習を始めたのですが、「どうして、ぼくだけが、こんなつらい思いをしなくてはいけないのだろう」と考えてばかりいました。退院したら、また大好きな水泳ができるのか、不安もすぐありました。そんな思いの中リハビリを続けていると、一人の看護師さんが、ぼくに声を掛けてくれました。そして、事故で足を失った高校生が今、車イスバスケの選手になって活躍している話をしてくれました。

障害の種類はたくさんあって、突然つきつけられるものもある。昨日まで当たり前前にできていたことが全くできない。くやくしてたまらない。生きるために、何度も何度も練習をしなくてはいけない。ただ、そんな頑張り屋さんの子が、着

替えや排泄、自分のことを自分でできるようになった時、ものすごいスピードで何でもこなせるようになるということ。目標がある子は、びっくりするくらい強いということ。自分のことをかわいそうだと思い、つらいことから逃げる言い訳にしてほしくないこと。他の人の障害の大小だけを見て、自分より下だと勝手に決めつけてはいけないこと。それは、今のぼくの心に響く、耳の痛い話でした。

ここにいる人達は、車イスからベッドに移る、そんな簡単なことでも、しっかりと向き合って、あきらめずに練習をしています。ぼくは、リハビリをさぼりがちで、車イスばかり乗っていた自分はずかしくなりました。だから、それからは、毎日足を引きずりながらも、一歩でも多く歩けるように練習を続けました。再びプールに戻って泳ぐことを目標に、前向きにもなりました。十メートル先のトイレまで自分で歩いて行けた時は、看護師さんや同じ病棟に入院していた子が拍手をして喜んでくれました。お母さんは、小さくガッツポーズをして、うれしそうに笑っていました。

ぼくは、この入院生活の中で多くのことを学びました。なんだか大変そう、かわいそうと思ってしまう人でも、本当は夢があつて、努力していて、毎日一生懸命で。すごく強くて、かっこいいことを知りました。だから、ぼくは、重度の障害

のある人を見て、自分はその人よりも幸せだとか、まだマシンだとか、人と比べて自分の今いる位置を決めるのはやめようと思いました。

ぼくにも夢があります。五歳の時からずっと思い続けている、とても大きな夢です。ぼくは、その夢に向かって前だけを見つめ、これからも進んでいきたいです。

「経験の中で得たもの」

富山県立南砺福野高等学校 三年

小 寺 里 奈

私は、幼い頃から小学生くらいまで障がい者のことはあまり意識することがなく、障がいがあるとはどういうことなのかとか、障害と共に生きていくとはどういう気持ちなのかとか考えたことがありませんでした。でも高校での授業を通して障害やその方々とのコミュニケーション方法について興味を持ちました。そして母と一緒に手話を習いに聴覚障がい者の方が行っている手話教室に行くことになりました。手話教室だとは知っていたものの言葉も使えるのかなと思っていたのですが実際には本当に言葉を使わず手話だけで会話していたため何を言っているのか分からずとまどいました。また、障がい者とは自分たちとは全く違った種類の人だと思っていました。しかし、実際に聴覚障がい者の方々と会話したり触れ合ったりしているとそれは全くの間違いであり自分たちと同じだと思いました。彼らは、初歩的な手話から根気強く何

も知らない私に教えてくれました。そして、彼らの楽しそうな笑顔を見ていると自然と私の心も彼らとうちとけていくのを感じました。私が彼らにいていて少し自分とは違う世界に住む人たちなのだという気持ちは全くの間違いであり、そのような考えを持っていた自分が恥ずかしくなったのを覚えています。彼ら障がい者も私たち健常者と同じひとり人間なのです。

その後、福祉の勉強を行うため、高校一年生の冬に障がい者支援施設に実習しに行くことになりました。その時は、私はかつて手話を習いに障がい者の方に会いに行った経験を踏まえ、自分から垣根をつくらずに積極的に彼らに話しかけコミュニケーションをとることを心掛けました。彼らの一生懸命にコミュニケーションをとろうとしている姿を見ると私も一生懸命にものごとに努力しなければいけないと思い、

彼らの純粋な心からの笑顔を見ると、私も純粋に心からものごと、人々に接しなければいけないと思いました。私は、障がい者支援施設での実習を通して健常者から学べる以上のものを障がい者との交流の中で得たような気がしました。

自分ひとりで生まれてきて、自分ひとりで生きて行ける人間などいません。人はだれもが自分ひとりで生きていけるような気になるときもありますが、人は必ずだれかに助けられだれかに支えられて生きて行くものだと感じます。私は障がい者との交流の中で改めてそのことに気付かされた思いがします。人と出会い、ふれあい、心の輪を広げてゆくことは人生を豊かにし、自分を人間として成長させてくれることにつながります。そして、人として成長した自分は、自分が得たものを今度は他の人たちに与えることができます。自分が他の人を成長させ、他の人に幸せを与えるかもしれないのです。そのことに気付いたとき、私は人とふれあうことの大切さに改めて気付きました。

障がい者の人たちには、障がい者施設に入り、私たちとは違った空間で生き、生活をおくっている人が確かに多くいます。彼らは私たちのように走り回ったりはできないかもしれませんが、私たちのように自由にいろいろなところへ出かけたりもできないかもしれません。しかし、彼らの心は私たち

と同じであり、彼らの望むものは私たち健常者となんら変わりはありません。そのことに気付いたとき、私たちは本当に彼らと同じ垣根をとりはらい、彼らとうちとけて会話をかわすことができるのかもしれませんが、ひとりひとりがかけがえない人間であり、だれもが自分と同じように悩みを持ち、自分と同じようにひたむきに生きようとするひとりの人間であると気付いたときに、ふれあいの本当の意味がわかるのかもしれません。

私が障がい者支援施設へ何度か訪問させてもらった経験は私の心を豊かにし、人間性を高めるのにとても役に立ちました。これからもこの経験を踏まえて、さらに人とのコミュニケーションを大切にし、障がい者の身になり考え、行動できる人間になれるように努力していきたいと思えます。そして、障がい者の立場に立って医療に従事できる人間になりたいと思えます。

富山県立南砺福野高等学校 三年

「小さな工夫は大きな希望」

追分優那

私は、障害を持った高齢者の方とふれ合い、障害を持っていても出来ることがあるということを知っていただき、もっと自分に自信を持ち生活を送れたら良いと思いました。

私達の学校には福祉について学んだり、知識や技術を習得したりすることができるよう、実際に高齢者施設や障害者施設へ行き、介護実習をさせていただくことができる福祉科という学科があります。私は、その介護実習を通して実際に体験し、障害を持っていても出来ることがあるということや、自分に自信を持って生活していただくことの大切さを知ることができました。

一、二年生の介護実習では高齢者施設や障害者施設へ行き、様々な利用者の方とコミュニケーションを取ったり、介護者の方にお願いされた仕事をしたりするということが多くありました。しかし、三年生の六・七月の介護実習は今までと違

い、「こうしたい」「これができるようになりたい」という思いを持っておられる利用者の方を自分で探し、受け持ち利用者としてケアプランや介護計画を考え実践するというものでした。さらに、三日間の介護実習で受け持ち利用者の方を決定しなくてはいけなかったためとても苦労しました。

私が受け持ち利用者の方に選ばせていただいた方は、Kさん女性で、帰宅願望がとても強い方でした。多い時には三十秒に一回のペースで「私、家に帰らんなん。電話せんなん」と口にされます。そのため私が、「お家にはお電話しておきましたよ。帰ったら何されるのですか。」と声かけを行いました。すると、「洗濯とか皿洗いとかかな。私、お掃除とか好きやから。」と言われました。このことから私は、受け持ち利用者のKさんは昔、家事をよくやられていたと気づいたため次の二つのケアプランを実施させていただくことにしました。それ

は、コップ洗いとKさんのお部屋の近くの手すり拭きです。まずコップ洗いでは、私が洗剤で利用者の方、約三十人分のコップを洗い、それをKさんに水洗いしていただく方法で行いました。しかし、コップを洗っていた所水道は自動で出たり止まったりするものであったためか、コップを十個程度洗い終えると、「私、お手洗い行ってくるわ。」と言われ作業をやめられてしまいました。そのため二回目に実施させていただく際は、私が水洗いを行い、Kさんに洗剤で洗っていただく方をお願いしました。すると、Kさんにスムーズにコップを洗っていただくことができました。この体験から私は、小さな気づきや工夫からでも、その方のできることにつながるということを知ることができました。次に、Kさんのお部屋の近くの手すり拭きを実施させていただいた際は、Kさんに水で濡らした雑巾を渡し、私が消毒液をかけた所を拭いていただくという方法で行いました。するとKさんの口から、「私、掃除大好きやわ。」という言葉を書くことができました。さらに、コップ洗いを実施させていただいている際も、手すり拭きを実施させていただいている際も帰宅願望を訴えられることはありませんでした。そのことから、この二つのケアプランは受け持ち利用者のKさんに合ったものだったのではないかと思います。

最後に、もう一つ私が気になった行動がありました。それは、朝食後と昼食後に車いすでホールをうろろされていたということでした。私は、Kさんがリハビリでシールアートをされていたことから、今の季節に合ったシールアートをしていただき、今の季節を理解し、楽しいと思っただけのよいな活動を行いたいと思いました。一回目では、私の手本を見ながら白い丸の中にシールを貼っていたという方法で行ったのですが、シールに柄がついていたことからか、どこにどれを貼ったら良いか分からなくなっておられました。そのため二回目に実施させていただく際には、シールの柄に合った文字を丸の中に書き、「これは何の柄ですか。」と訪ね、「これはリンゴだね。」と言われたら、「そしたらこのシールは、"リ"と書いてある所に貼ってくださいね。」と声かけを行いながらやっていたできました。すると、利用者の方に「これ楽しいわ。」と言っていたことができたのでとても嬉しかったです。

このように小さな工夫をすることで、今までできなかったことができるようになったり、難しいと思っただけのことを楽しいと思えるようになったりするため、利用者の方と深くふれ合い、その方に合った援助方法を見つけてあげることが大切だと感じました。

障害者週間のポスター

○最優秀賞

【小学生の部】



「楽しいピアノの音」

富山市立東部小学校 三年

南 なん
日 にち
花陽実 かひみ

【中学生の部】



「助ける心繋がる心」

射水市立小杉中学校 二年

竹 たけ
内 うち
沙 さ
羅 ら

○優秀賞

【小学生の部】



「たすけあいの心」

高岡市立福岡小学校 三年

いし うら ゆい
石 浦 結



「みんなが仲良く暮らせる社会へ」

富山市立藤ノ木小学校 六年

はやし みず は
林 瑞 葉



「みんなが生きる安心社会」

射水市立小杉中学校 二年

たか まつ ね ね
高 松 寧 々



「心の壁をつくらないで」

射水市立小杉中学校 二年

はっ とり さつ き
服 部 颯 希

【中学生の部】

平成三十年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

1. 趣旨

障害のある人もない人も共に生きる社会を築く前提となる「相互理解」の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するものである。

2. 主催

内閣府、富山県

3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

5. 募集テーマ

- (1) 心の輪を広げる体験作文
出会い、ふれあい、心の輪——障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう——
- (2) 障害者週間のポスター
障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現

6. 応募資格

- (1) 心の輪を広げる体験作文
小学生、中学生及び高校生・一般（特別支援学校の小学部、中学部、高等部の児童生徒を含む）
- (2) 障害者週間のポスター
小学生及び中学生（特別支援学校の小学部、中学部の児童生徒を含む）

7. 募集の方法

- (1) 心の輪を広げる体験作文
① 作文の題及び内容

作文の題は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづつたものとする。募集は、小学生、中学生、高校生・一般の三部門に区分して行う。

なお、応募作品は未発表のもの一編に限る。

② 制限字数等

一編あたりの制限字数は、小学生及び中学生については四〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生・一般については四〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

なお、用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙（B4判縦書き）を用いること。

③ 応募者の属性等に関する参考資料

題、住所、氏名（ふりがな）、年齢（生年月日）、性別、職業又は学校名（学年）、電話・FAX番号、その他参考事項（障害の有無・程度等）を記した用紙を添付する。

④ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 Tel.〇七六―四四四―〇二二三

⑤ 募集期間

平成三十年七月二日（月）から九月三日（月）までとする（当日消印有効）。

(2) 障害者週間のポスター

① 内容

「障害者週間」を広く周知し、障害者に対する理解の促進等に資し、障害のある人となない人との相互理解を促進するものとする。

募集は、小学生、中学生の二部門において行う。

なお、応募作品は未発表のもの一点に限る。

② 規格、画材等

規格は、画用紙B3判（横三六四mm×縦五一五mm）又はいわゆる四つ切り（横三八二mm×縦五四二mm）を使用し、これに満たない作品は、B3判又は四つ切りの大きさの台紙に貼付する。彩色、画材は自由とする。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。

小学生部門においては、標語その他の文字を入れないこととする。

中学生部門においては、標語その他の文字を入れることは差し支えないが、「十二月三日〜九日は障害者週間」の標語は使わないこととする。

③ 応募者の属性等に関する参考資料

住所、氏名（ふりがな）、年齢（生年月日）、性別、学校名（学年）、電話・FAX番号、その他参考事項（障害の有無・程度等）を記した用紙を添付する。

④ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五十二 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑤ 募集期間

平成三十年七月二日（月）から九月三日（月）までとする（当日消印有効）。

8. 選 定

応募された作品については、審査のうえ、各部門ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月末までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。

9. 表 彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（二万円相当、五千元相当）を贈る。また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。

ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

作品は原則として返却しない。ただし作品の返却を希望するときは、応募時に申し出ること。

平成三十年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計		
	男 性	女 性	
小 学 生	7	5	2
中 学 生	54	16	38
高 校 生 ・ 一 般	89	5	84
合 計	150	26	124

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計		
	男 性	女 性	
小 学 生	0	5	5
中 学 生	5	10	15
合 計	5	15	20

平成三十年度

「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生 元水橋郷土史料館長

島崎 俊哉 富山県有美術品管理事務員

池田 浩一郎 富山県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉・ボランティア振興課長

久々江 除作 富山県身体障害者団体協議会会長

平野 幹夫 富山県手をつなぐ育成会常務理事

青山 正二 富山県精神保健福祉家族連合会理事長

稲垣 岳彦 富山県厚生部健康課副主幹・精神保健福祉係長

鍛冶 茂郎 富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班指導主事

大村 政人 富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・
障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

平成三十年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター